

日5〜6本買い、酔ったまま一日を過ごす。同地区に住む他の男性は、行き倒れは自業自得や。生活保護を受ければ、酒やキャンブルを使って、最後は体を悪くして死ぬ。この前も隣のテントに住んでいた男が、朝に死んだ。酒で胃をやって血吐いて……。NPOなんて餌をばら撒いて売名しとるだけ。生かすならもっとマシなヤツおるやろ」と毒づいた。

生活保護を受け寝床を得ても、結局は行き倒れていく。亡くなっていく人々は、どういう人生を経たのだらうか。「地方の次男や三男で全国を転々とし、最後は日雇いで働けなくなり、路上生活になるパターンが非常に多い」(生田氏)

ある海に面した大都市では、特殊な事情を垣間見ることができた。路上での緩やかな死よりも、自ら人生の幕を下ろすことを選ぶ人々のケースだ。この都市では多くて年間5〜6件の身元不明遺体が発見される。それは同規模の大都市と比べれば異様に多く、県全体の数も全国的に多い。市の職員は語る。

「この都市の駅は鉄道の終着駅。自殺を考え、電車を乗り継ぐうちに辿り着く場所なのです。しかも駅の改札から真つすぐ歩けば海に行きあたる。そこから身を投げるのでしょね……」

遺体は、漁港、岩場、砂浜、さまざまな場所で発見される。所持品はなし、もしくは極端に少なく、

借金もしくは貧困を苦にした可能性が高いという。そしてそれは水山の一角で、外洋に流され発見されないことも少なくない。また、職員は納骨堂に案内してくれた。

1坪強の敷地に建てられたコンクリート製の建物で、内部には3段の棚があり、限界まで骨壺が納められていた。収納しきれない分は、床に積み上げられており、150個はあるという。それぞれに死亡日時と発見場所、性別などが書かれていた。「女」とだけ書き殴られているものも。横には、遺留品が一つの袋に詰めて置いてあった。あまりの虚しさに、記者は思わず手を合わせていた。

**30〜40代で死を待つ人も出始めている?**

住所不定無職、身寄りもない境遇の人々には、どう巡り巡っても悲惨な末路が待ち受けている。しかし彼らが「幸福」に亡くなる場所が、山谷にあった。NPO法人「きぼうのいえ」はそんな人々が辿り着くホスピスである。入居者は路上生活や独居状態から、末期癌や肝硬変など命にかかわる重病を疾病したが、治療を選ばなかった

人たちだ。入居費は生活保護受給額で賄われる。施設長の山本雅基氏は語る。

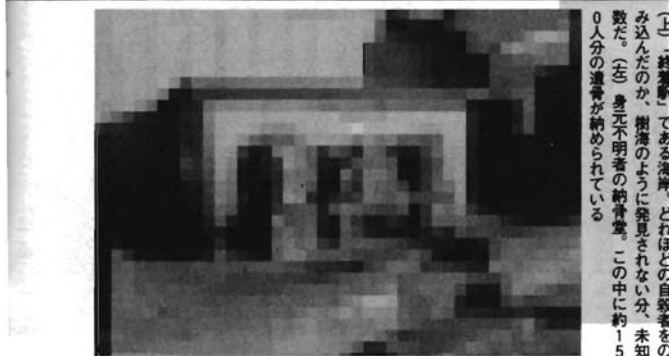
「ほとんどが、翌日には行き倒れてもおかしくなかった人たち。ここでは痛みを和らげながら、安らかな最期を迎えてもらいます。入居者は昭和30年代に集団就職で上京した「金の卵」世代(60〜70代)が中心。認知症や精神障害を患っていたり、前科があったり、何らかの理由で家を出してきた人もいます。彼らは総じて社会に不信感を抱き、絶望しており、孤独。しかし根気強くケアすることで、多くの入居者は亡くなる際に感謝の言葉を残してくれます」

取材当日にも亡くなった男性がいた。寝台に安置された彼の顔には、確かに安らかな表情が浮かぶ。行政や各団体の話によると、現在、行き倒れになる人は50〜70代が中心だという。しかし山本氏は、このように話す。

「実は当施設に、30〜40代の人が多いです。通常であればこの年代は、どんなに貧困や病気を抱えていても「十分働けるだろう」という理由で生活保護を断られる。福祉事務所で、何らかの偶然や手続き上の穴があつてこちらに来たと考えられます。技術革新で職能が生かせずに路頭に迷った旧世代とは違い、今、派遣などを転々としている30〜40代は仕事自体がない。今後、入居者に若年層が増えるかどうかは予測できませんが、健康体で余命がある年代が一番シビアな境遇に置かれる社会になりつつあるのは確かです」

行き倒れは、老年だけの問題ではなくなるかもしれない。

**のどかな大海原だが自殺者続出中**



(上)「終着駅」である海岸。どれほどの自殺者をもみ込んだのか、樹海のように発見されない分、未知数だ。(左) 身元不明者の納骨堂。この中に約150人分の遺骨が納められている